

オールは、運んだり、置いたりするときの扱い方が重要です。シャフトを中心に、細心の注意で扱きましょう。

1 ブレードを上／下に

Blade Up/down

オールは、基本的に、ハンドルを地面にブレードを上に乗せますが、逆に置くこともあります。どちらにしても、風で倒れたり、誰かにつまずかれたりしないようにしましょう。またハンドル端やブレードの先端が擦れて削られないように、十分注意しましょう。プラスチックブレードはかなり丈夫ですが、それでも長い間には磨り減りやすく、特にポルテックスエッジのプラスチック部品は磨り減りやすいのでメーカーは地面に接触しない置き方を指定しています。一方のグリップも磨り減りやすいものです。ラバーグリップは交換できますが、ウッドはそうはいきません。要は、「どちらの端も丁寧に扱おう」ということです。



オールをむやみにまたいではいけません。大切なもの、敬意を表するものの上はまたがないという伝統と、リスク(砂がスリーブにつく、つまづくなど)の回避のために。



オールをまたがないこと！

2 シャフト！

Shaft

シャフトには、細心の注意を払いましょう。荷重に対して強いカーボンシャフトも、小さな傷をつけると、簡単に折れてしまいます。

3 スリーブ！

Sleeve

発艇台などの清潔な床などの場合を除き、オールを地面(土や砂の上)に直接置くべきではありません。グリスを塗っていた昔前ほどではないにしても、スリーブに砂をつけたりするリスクがあります。(補足:現代のプラスチックスリーブは、グリスなどを塗るのは不要とされていますが、より適切なケアとしては、シリコン系の潤滑スプレーを吹くことです。)



地面に直接オールを寝かせるのは避けよう。

4 運び方

Carrying the oars

オールは、ブレードを(何かに接触させず、よく見えるように)前にして、重心位置で持って運びます。肩に担ぐのは、伝統的に「ぞんざいに扱っている」とみなされ嫌われる姿勢であること、ブレードが、眼の高さに来て周囲の人にケガのリスクを増すことなどから、避けるべきです。



オールはブレードを前にして大切に運ぼう。



肩に担ぐのはなぜ？粗雑さは強さの象徴ではない。

数本のオールを束にして抱えてがちゃがちゃと音を立てながら運ぶのは、まるで、「レースのときに折れますように」と祈っているようなものです。シャフトに微細な傷をつけます。